本眞劍（二）

倉橋惣三

六

教育の最普通なる誤謬は教育の目的が直に兒童の目的と一致すると考へることである。しかも教育の目的と兒童の目的とは決して一致して居るものではない。教育は兒童を賢くしようとする。兒童は決して賢くならうなどとは思つて居ない。教育は兒童を善人にしようとする。兒童は決してそんな望みを持つて居ない。兒童は遊びの面白からんことを求める。お噺の面白からんことを求める。否、もつと嚴密には面白いといふことさへ求めて居ない。面白いといふのは結果である。兒童の沒頭して居ることは遊びそのものである。傾聽して居るものはお噺そのものである。その他に何も求めても考へても居ない。つまり、教育の目的は遠い——現在とは離れたことである。それに對して兒童の目的は現在にある。教育の目的は現在が持ち來すべき結果である。間接である。それに對して兒童の目的は現在のことそれ自身である。直接である。

教育が自分の間接目的を兒童も直に理解する筈だと思ふのは大いなる誤解である。その上に、此の間接目的の故を以て、屢々兒童の直接目的を無視するのは教育の甚しき亂暴である。しかも此の誤解が常に當然として行はれ、此の亂暴がいつも平氣で行はれる。而して、教育といふ恐ろしい名のもとに兒童の直接目的を蹈みにぢつて仕舞ふ。之れが、教育が兒童の本眞劍を失はせる大きな危險の一つである。——

一時一事、一事一我の木眞劍は、たゞ自己の目的に向つてのみなし得る。賴まれて出來るものでもなければ、强ゐられて出來るものでもない。本眞劍は事に忠なると共に自己に忠なることであるその自己の目的を蹈みにじられて居る處で、何時本眞劍を經驗し得る機會があらう。

七

敎育の間接目的が、尙ほ適切にいへば敎育の目的の間接性が、奪ひ去るものは兒童の直接目的のみではない。同時に敎育者からも其の目的の直接性を奪ひ去ることが往々ある。これは敎育の亂暴といふよりも寧ろ悲劇といふものである。

見るからに不熱心な、無生氣な敎育者はいふ迄もない。熱心に見られ、又自らも熱心と意識して居る敎育者の中に、案外、眞の意味の本眞劍といへない人が隨分澤山ある。その人は、餘りに結果主義者であつて、現在の爲に現在を貴重することを知らない。又その人は、餘りに醒めたる義務の遂行者であつて、興味にさそわれてゆく眞純なる稚氣を有しない。兒童に理解させる技倆はもつて居るが。自らは何等の感興をもち得ないお噺の話し手。兒童に歌はせることばかり考へて、自分では唱ふことの出來ない唱歌の先生、これ等は皆此の種類に屬する人々である。否寧ろ大抵の敎師といふ敎師が多少とも此の共通の危險に近づいて居る。

扨て此の危險は、敎育者にとつて悲しい不幸であることはいふまでもない。しかも、其の不幸は斯かる人々に始終接觸し、敎導せられて居る兒童にも必ず惡い影響を與へずには居ない。すなはち兒童は斯ういふ敎育者から知識を敎へられ、業を課せられると共に、恐ろしい不眞劍を見せつけられ、又傳染させられる。或る目ざとい兒童は敎育者の此の不眞劍を見ぬいて、輕侮の感を懷く。或るおとなしい兒童達は、無意識の中に、自分を此の不眞劍に順應させる。どちらにしても、いつの

間にか不眞劍な兒童にさせられることは一つである。

八

兒童の直接目的を無視するといふ亂暴も、教科そのものに沒頭的興味を有し得ないといふことも兒童の年少なる故に、教科のたわいなき故に、幼兒教育に於て一層起り易いことである。幼兒は其の目的が一層直接的で、間接的目的に就て到底理解することが出來ない程に直接的興味の子である。或は目的といふ意志的な言葉が用ゐられない程に興味の子である。しかも幼弱なる幼兒の精神は、容易に自分以外の勢力に抑えられ又引づられる。そこに幼兒の本眞劍を害ひ易い二重の危險があるのである。幼兒生活の內容、それから撰び來つて幼兒教育の手段とする處のものは、其の單純さに於て教育者の興味をさそひ難きものである。そこに教育者の不眞劍が起り易い。

九

幼兒の周圍が多過ぎる。しかも亂雜に多過ぎる。朝の鈴が鳴る。それを第一の驚きとして、次から次へと、不秩序な——教育者は勝手に秩序正しいと獨りぎめをして居るが、幼兒には何の秩序も感じられない——仕事、或は遊戯と名づけられる仕事が與へられる。まるで追つかけられて居る樣である。その上に友達からの氣まぐれな刺戟が、忙しい誘惑を與へて、心をあれからこれへと、これからあれへと引つぱつてゆく。こういふ幼稚園に於て、一時一事の本眞劍に入ることは殆んど六かしいことゝ言はざるを得ない。

幼兒の監視が利きすぎる。先生の目が、園長さんの目が、幼稚園といふ場所それ自身の大きな目が、幼兒にとつては始終自分を見て居る目である自分を見て居る目には自分を見せ度くなる。人に自分を見せる時には、先づ自分で自分を見る。時には自分を見る目に、自分を隱そうとすることもある。しかも、自分を人に隱くして居る時には却

つて自分で自分をよく見て居る。こういふ幼稚園では、一事一我の本眞劍が保持され難いといはなければならない。

しかも我等は、どうしても、何を置いても、幼兒の本眞劍を維持し、又發達させなければならない。

十

あけぼの

紅(くれなゐ)細くたなびける
雲とならばやあけぼのの
雲とならばや

やみを出でては光ある
空とならばやあけぼのの
空とならばや

春の光を彩(いろど)れる
水とならばやあけぼのの
水とならばや

鳩に履まれてやわらかき
草とならばやあけぼのの
草とならばや

――藤村詩集より――